

# ゆうがお新品种「ゆう太」(野州4号)の育成について

## 1. 育種のねらい

かんぴょうは本県の代表的な特産物で、県中南部の畑作物として広く栽培されているが、10年ほど前からウイルス病の被害が増加し、大きな問題となってきた。そこで、昭和57年より特にキュウリ緑斑モザイクウイルスを対象とした耐病性品種の育成を行った。

## 2. 育成経過

昭和57年にしもつけあおと緑斑モザイクウイルスに強い小山在来を交配し、昭和58年以降系統選抜を行った。昭和59年のF2世代(雑種第2世代)で白色果の有望個体を選抜し、その後自殖をくり返し選抜固定を図った。F4世代で特性がほぼ固定化してきたことから、昭和62年に場内と現地(小山市)で特性検定を行った結果、ウイルス病に強く、収量、品質とも優れることが認められたので、F6世代で選抜を終了し、昭和63年2月に野州4号の系統番号をつけ、同年12月に種苗登録を出願し、平成2年3月ゆう太と命名した。

## 3. 特性の概要

病害抵抗性：ウイルス病に強く、感染してもしもつけしろやしもつけあおに比べて病徴が極めて軽い。

形態的特性：葉形は葉の縁が波形を呈し、大きさはしもつけしろ、しもつけあお及び小山在来などいずれの品種よりも大きい。

生態的特性：つるの伸長性はしもつけしろと同程度であるが、草勢はしもつけしろやしもつけあおより旺盛である。開花始め及び収穫始めはしもつけしろと同程度で、小山在来やしもつけあおより早生である。

果実特性及び収量性：果色は白、果形は洋梨形で、しもつけしろや小山在来より果高が高い。果実の肥大は小山在来より優れ、収量はしもつけしろ、しもつけあお及び小山在来より多収。

製品の品質：果実からかんぴょうとなる歩留りはしもつけしろやしもつけあおより優れる。色沢や硬さはしもつけしろと同程度で、食味も同様に優れる。

## 4. 成果の要約

ゆうがおの耐病性品種の育種を実施した結果、昭和63年に白色果でウイルス病に強く、収量、品質とも優れる新品种「ゆう太」を育成することが出来た。

この品種の主な特性は、特にキュウリ緑斑モザイクウイルスに強いことと、果実は洋梨形の白色果で肥大が良く、収量もしもつけしろなどよりも優れる。

(担当者 栃木分場 高野邦治)

表-1 生育特性 (昭和62年)

品種・系統名	つる長 cm	葉数 枚	茎径 mm	最大葉 cm		開花始 月 日	収穫始 月 日
				タテ	ヨコ		
ゆう太	401	26	11.2	23.4	35.0	6. 14	7. 6
しもつけしろ	402	26	11.1	23.0	33.0	14	6
しもつけあお	358	23	10.6	22.6	34.0	14	7
小山在来	352	25	11.3	22.4	34.4	15	7

注. 生育は6月25日測定。

表-2 収量及び製品の特性 (昭和62年)

品種・系統名	時期別収量 (個/株)			総果重 kg/株	かんぴょう製品			
	~7/20	~8/10	計		歩留り	色 沢	硬 さ	苦 味
ゆう太	7.6	7.2	14.8	87.5	3.7%	良	中	無
しもつけしろ	6.5	5.5	12.0	74.3	3.2	良	中	無
しもつけあお	5.5	4.2	9.7	55.9	3.3	良	中	無
小山在来	6.3	6.9	13.2	82.0	3.6	良	中	無

表-3 ウイルス病の発生

品種・系統名	60年	61年	62年		(62年現地)	
	発生程度	発生程度	発生程度	被害度	発生程度	被害度
ゆう太	微	微	微	20	微	10
しもつけしろ	多	多	多	100	多	60
しもつけあお	多	多	多	100	-	-
小山在来	微	微	微	20	微	5

注. 発生程度は無、微、少、中、多の5段階で表示。ゆう太の61年、62年はF4、F5世代でのデータ。

表-4 生育特性及び収量 (昭和62年現地試験)

品種・系統名	つる長 cm	収穫始 月 日	時期別収量 (個/株)				同 左 指数%
			~7/20	~8/10	~8/30	計	
ゆう太	480	7. 1	6.6	5.8	4.4	16.8	145
しもつけしろ	472	6. 29	6.0	4.0	1.6	11.6	100
小山在来	422	7. 5	5.0	6.4	2.2	13.6	117

注. 生育は6月27日測定。